

## 書籍紹介

## 『鳥類のデザイン』

(カトリーナ・ファン・グラウ 著、鍛原多恵子 訳、川上和人 監訳；みすず書房、  
2021年7月刊、定価6,300円＋税、384頁)

浅川 満彦

酪農学園大学

題名だけでは芸術一般本と想起されてしまい、日々臨床に忙しい皆さんの視野には入らないのではと危惧している。もっとも、副題「骨格・筋肉が語る生態と進化（原典題名”The Unfeathered bird”）」まで目に入れば、手に取ってもらえる可能性は格段に増大しよう。実際、本書は総論と各論に分かれ、まず、前パートは頭頸部・胴部・翼部・後肢・尾部に大別され、羽が除去された筋肉と骨格の形態的特徴と進化・生態学的な意義が概説されている。

しかし、各論で示された目次の分類目orderには、困惑する項目が混在している；Iタカ目 ハゲワシとコンドル／タカ／フクロウ、II カササギ目 オウム／エボシドリなど／カワセミ／サイチョウ等／オオハシとゴシキドリ／キツツキ／ハチドリ、III カモ目 カモ類、〈家禽含む〉／ペンギン／アビ／カイツブリ／アホウドリ、ミズナギドリ、ウミツバメ／ネッタイチョウとゲンカンドリ／ペリカン／カツオドリ／ウとヘビウ／カモメ、アジサシ、ハサミアジサシ、トウゾクカモメ／ウミスズメ、IV シギ目 フラミンゴ／サギ／ハシビロコウ／コウノトリ、トキ、ヘラサギ／ツル／クイナ／カグー／シギ・チドリ、V キジ目 キジ、ニワトリ／サケビドリ／ツメバケイ／ダチョウ、キーウイ、その他平胸類／シギダチョウ／ノガン／サケイ／ドードーとロドリゲスドードー、VI スズメ目 ハト、イエバト／ヨタカ／アマツバメ／スズメの仲間。“カササギ目”が見えるように、本書の分類体系は、わざ

わざカール・フォン・リンネに準じている。自然史博物館学芸員であり剥製師である著者のオマージュなのだろうか。いずれにせよ、各所で提示された種を適応や変化などを、進化生物学的に理解をする場合、読み手が新しい系統関係に落とし込みつつ解釈するしかない。

評者は肉眼含む解剖学は専門外なので、本書全般に関してのアカデミックな評価は許容されない。だが、鳥好きの個人としては、全身あるいは局所の骨格像と剥皮後の筋肉の緻密な描画に関し、類似した作品を観たことが無く、思う存分楽しめた。冒頭、本書は芸術系ではないような書き方をしたばかりだが、ある意味、そのような分野に親和性が高いかもしれない。たとえば、ルネサンス期の巨人レオナルド・ダ・ヴィンチにより描かれた人体解剖図を、今日、医学解剖学のテキストとしては活用しまい。だが、我々は、それらを純粹に芸術として楽しみ、感動を覚えることはできよう。本書の数多図版は、まず、そういった鑑賞の対象として捉えたい。

それにしても、なぜ、表現が絵画なのか。ダ・ヴィンチが活躍した15世紀中葉には写真機の技術はなかった。したがって、彼は記録の手段として解剖図をものにしただけであり、少々乱暴だが、現代人は勝手にアートとして看做し、有難がっているだけである。だが、人工知能AIが急激に発達し、そういった装置で鳥類骨格の形態を具に画像に残せる現在、敢えて、手描き絵画という手段を選択したのか。

評者の専門に戻るが、寄生蠕虫の分類学では、描画で特徴を示した形態が重要な情報源であり、これを補足する形で電顕含む写真像や分子配列が記載論文に併記される。形態を解釈し、それを研究者が図に投影させて既知種と比較するための根拠とするのである。写真では、重要な構造もそうではないものも均一に示されてしまい、こういった論文上では不適切な資料となる。おそらく、本書著者もそのような目論見から絵画という手段を導入したのであろう。だが、せっかく描いた各図であるがー言い方が良くないがー、描き放しで、番号が附記されていなかった。そのため、本文解説では具体的にどの図について述べているのかがとても判り難い。また、引用文献も明示されていなかったのも困る。たとえば、(またまた寄生虫関連で恐縮するが)、215頁にハジラミ類と宿主鳥類との共進化の興味深い言説があったが、その引用文献が明示されず、学問的興味の発展性を妨げていた。おそらく、この情報源は、もはや古典的なHopkins (1942) あたりであろうが・・・。

以上、原初的な分類体系による序列、図示番号や引用文献の欠落などは、本書がいわゆる専門書を目

指していないことは明らかであった。鳥類医学貢献に邁進される皆さんは、そのような立場を脇に置き、このような“欠点”了解しつつ、鳥類を骨まで愛する鳥類愛好家として本書を堪能してみたい。ひょっとしたら、本書により技術と芸術は、兄弟の関係にあることを会得するかもしれない。卓越した臨床家の技術が芸術的であると実見される本研究会の皆さんには、きっと共感してもらえ違いないと期待している。

評者も、当然、画と本文を満足したが、個人的には本書冒頭“謝辞”にも感じ入った。何度も何度も申し訳ないが、評者は野生動物の寄生虫を主要な研究対象にしてきた。そのために、研究材料となる野鳥死体を集めてきた。本書で描かれたモデルも、野外で見つかった死体であり、その収集で協力頂いた人たちについて、それぞれ、どうやって迷惑をかけたのかが具体的に列挙されていた。「いやー、そうなるよねえ！」と一人納得しつつ、笑ってしまった。

#### 引用参考文献

Hopkins, G. H. E.(1942). The mallophaga as an aid to the classification of birds. Ibis, 84(1), 94-106.